

パネルディスカッションの発言内容

平成30年10月13日（土）15:15～16:00

沼田中央公民館・4階ホール

テーマ 「スマホマナーについて考える」

- コーディネーター 伊藤 洋一 氏（NPO法人ぐんま子どもセーフネット活動委員会）
- パネリスト
 - ・吉村小児科院長、日本小児科医会子どもとメディア委員会担当理事 内海 裕美 氏
 - ・群馬県警察本部少年課少年育成センター 調査官 神保 衛 氏
 - ・みなかみ町社会教育委員・元養護教諭 鈴木 貴代美 氏
 - ・沼田市小中学校PTA連合会 会長 小熊 政則 氏

<自己紹介>

伊藤 まずは、私とパネリストの皆さんの自己紹介をします。

私は「NPO法人ぐんま子どもセーフネット活動委員会」のインストラクターをしております伊藤です。本職は、学校の教員として、高崎市内の中学校の校長を勤めています。

神保 警察本部少年課少年育成センターの調査官として勤務する神保です。調査官とは、非行少年に関わる問題やその原因、背景などについて調査・研究し、学校や警察の関係団体の会議などで伝える活動を行っています。

鈴木 みなかみ町社会教育委員を務めています鈴木です。以前は養護教諭として、保健室から子ども達の様子を見ていました。

小熊 今年度、沼田市小中学校PTA連合会の会長を務めております小熊です。本職は、商店街で商売をしております。本日は、保護者の代表として席に座らせて頂いております。

<スマホ社会の現状と保護者の対応方法>

伊藤 先程、内海先生の講演で「今のままスマホを使い続けると、今後大変なことになる。」というスマホ社会へ警鐘を鳴らすお話がありました。色々な弊害や悪影響がある中で、子ども達はどのように使っていけばいいのか、考える必要があります。

先生の講演の最後の方に「社会の責任、大人の責任」についてのお話がありました。本日、高校生も複数名来場しておりますが、高校生もあと何年かすれば、大人になり、母親、父親の世代となっていきます。その他の来場者の皆さんは、母親、父親世代若しくは、その上の世代の方

と思われます。つまり、(来場皆様方は)子育てをしている世代とその世代を子育てしてきた世代なのかなと思います。我々大人として、何をして行くべきなのか、ここに焦点をあてて、パネルディスカッションをすすめていきます。高校生の皆さんは、今後大人になってから、という視点で考えて欲しいと思います。

問題提起ということで、資料に基づいて説明をします。「スマホマナーについて考える～親子の意識から～」と題する視点から考えます。資料は、大手キャリア事業者の調査を参考にしてあります。スマホを使用する小学生から高校生まで、つまり「使っている子ども」と、「使っている子どもの親」を対象に調査したものです。

最初が、「親子での食事中、スマホを使用しているか」ですが、『親の約60%、小学生の約30%、中学生の約40%、高校生の約50%』がスマホを使っていると回答しており、親子の食事中に、親が一番使っているという結果でした。子どもの使いすぎという話題がありますが、実際は親が最も使っています。

次に、子どもの視点から「食事中、親がスマホを使用すると何か感じることはあるか」ですが、『小学生約60%、中学生約55%、高校生約50%』と小学生が最も何かを感じています。では、何を感じているかについてですが、『使わないで欲しい』が約55%と最も多く、次いで『自分の話を聞いていない、つまらない、さみしい、わがまま』と子ども達は感じています。

続いて「食事中、スマホを置いている場所」、親、子ども達への質問です。一番多い答えが『食事をしているテーブルから少し距離を置いたところ』で、次に多いのが『手元、食事をしているテーブルの上』です。高校生に特に多いようです。いずれにしても、皆さん、手元や身近に置いているという結果です。私の見解では『自分のカバンの中、自分の部屋』が望ましいと思いますが、現実近く(に置く)ということです。

以上の子供達を感じ方を前提にしながら、話しをすすめて行きます。

スマホはパンデミックとまで言われる程、爆発的に普及し、使われていますが、色々と大きな弊害もわかってきています。本来親というのは、子どもを導いていく、守っていく立場です。そのような中で、親が「スマホに対して、どのように考えて子育てをしているのか」見ていくと、先程の資料(親と子ども達を感じ方など)からすると、(きちんとした考えはなく)厳しいなあ、というのが私の感想です。

この辺りの考えを、パネリストの皆さんに伺いたいと思います。

では、具体的にどのようにやっているか、最初にPTA連合会の小熊さんに、家庭でどのようにやっているか、教えていただいでよろしいでしょうか。



コーディネーター 伊藤洋一氏

小熊 我が家は、小学4年生と小学1年生の男の子で、まだ自分達でスマホを所持しておりません。

それでも、長男は、タブレットを使用する通信教育をやっていて、小さい頃から、タブレットなどの機器に馴染んでいるので、自分で勝手にインターネットを色々見ることが出来ます。ですから、子ども達にタブレットを渡す時には、機能制限をして、インターネットを見られないようにしてから、使わせるように気を付けています。

伊藤 親として「制限をかけるところに気を遣っている」というお話がありました。実際に制限をかけて、子どもに使わせることで、(子どもから)「もっと、こういうことがやりたい。何で僕の家だけ制限かかっているの。」などの言葉は出てきませんか？

小熊 タブレットは制限をかけていますが、実際のところは、親の目を盗んで、おじいちゃんのパソコンを使ってネットを見ております。毎日(それを)注意したり、怒ったりしています。

伊藤 やはり子ども達は、すごく賢いですし、また、先程内海先生の講話でもありましたが「スマホって結局、バリアフリーに出来ている、(つまり)誰が使っても直ぐに操作が分かるのが、スマホやタブレットです。ですから、小さい子どもはマニュアルを読んでいる訳ではなくて、感覚的に全部やり方をつかんでしまう。そこが怖いところです。今小熊さんの家が制限をかけているというのは、すばらしい家庭と思います。今後も心配は続くとは思いますが、(このように)実際に制限をかけている家庭はどれだけあるのか、個人的には心配なところです。

<学校現場における現状とその背景>

伊藤 次に、学校現場のお話を元養護教諭の鈴木さんに伺います。スマホやSNSの関係で、実際に変調をきたして相談に来たなどの経験をお話いただけますか。

鈴木 私は、39年間、養護教諭をしておりました。色々な学校を回ってきた中で、多かった問題は「友達にラインを送っても、返事が来ない。あるいは既読も付かない。グループラインからも外されてしまう。」などでした。そのような悩みを抱えて保健室に相談に来る子どもが、多かったように思います。更に、こうしたことが原因となって、友達関係がますます悪くなって孤立してしまう。また、先程内海先生の講話でもありましたが「本来人間は、人と関わりたいという思いを強く持っている」ものです。そのような中で、友達と関われないので、スマホを通して、見ず知らずの人と関わっていくという別の問題が発生します。

それともう一つは、なかなか面と向かって、ケンカをしない子ども達が多くなってきました。面と向かってケンカをして「言葉で言い合ったり、解決したり」すれば良いのですが、そうではなくて「ラインの中に友達の名前を書き込む、そして、他の子がそれを見る」ということで、一対一のケンカが、ますます広がってしまう、こじれていってしまう、このようなことにも悩んで保健室に来る生徒が見られました。

伊藤 鈴木さんは長く養護教諭を勤められて、ネットやスマホが普及する前と最近の子ども達の違いや変化を肌で実感されていますか？

鈴木 違いや変化を強く感じます。今日来場されている皆さんに、自分自身を振り返って考えていただきたいんですが、大人の皆さんは、お子さんと会話があるでしょうか？生徒の皆さんは、家族と会話があるでしょうか？顔と顔を合わせた家族や友達とのコミュニケーションがかなり減ってきているように感じます。また、夢中になれるものが無くなってきているように感じます。そうした状況から、スマホにはしる子ども達が増えてきているように思います。

伊藤 保健室って、私は今学校現場にいるので、よく分かるんですが、私が小さい頃は、どこか怪我をして行くパターンが多かったと思います。今は自分の学校でも、メンタル面の悩み相談が、養護教諭にすごく集まっています。むしろメンタル面のウェイトが大きくなっている感じがします。その辺りは鈴木さんどうでしょうか？

鈴木 そのとおりですね。特に中学生、高校生になると、「頭が痛い、お腹が痛い」の訴えで来室しますが、じっくり話を聞いてみると、友達関係、家族関係、勉強や部活など心の悩みを抱えて保健室に来る子どもが、怪我や病気よりも多くなってきていると感じます。



伊藤 その原因を、全てスマホやSNSに結びつけるのは少し乱暴かなと思いますが、鈴木さんのお話しにあった「コミュニケーションの問題」ですが、以前はもう少しコミュニケーション力を身につけて、(上の)学校に入学していたのに、最近はコミュニケーション力をつけずに学校に来る人が多い、と私は感じています。

鈴木 そうですね。自分が悩んだ時に、家の人に話をして「どうしたらいい？」「じゃあ、こうしたらいいんじゃないかな」という会話をしたり、子どもの様子がおかしい時は「どうかした？」と話しかけたり、友達同士でも「何か元気がないけど、どうした？」などと会話をしたりして解決するというのが、昔は多かったと思います。

最近では、人間関係が希薄になって来ているので、SNSの中で自分の悩みを書き込み、そこから見ず知らずの人とつながって、更には、会う約束をするという問題が起こると感じます。

伊藤 なぜ、最近の子ども達は、コミュニケーション力が未熟なまま育っているのか、その辺りの背

景などを内海先生に伺ってよろしいでしょうか。

内海 家族の単位が小さくなってきている、というのがあります。現在の祖父母世代の従兄弟は何人いましたか？今の子ども達に従兄弟が何人いますか？今の子どもには「保育園・幼稚園・家」だけで、大人の影響は親のみです。近所のおじさん、おばさんなどの斜めの関係はなくて、母親の子育てが直に、子どもに影響することになってきているので、お母さん達も大変です。また、親も忙しくなっていますが、何のために忙しくなっているか忘れてしまっています。

また、子どもが少なくなると、高齢者を支える力が無くなるだけではなくて、子ども同士が育つ環境がすごく薄っぺらなものになります。これは、子どもの責任ではなくて、大人や社会の責任です。昔の子どもの遊びはルールを勝手に変えられるんですよね。小さい子が入ってきたら、かけっこのスピードを遅くするとか、ちょっとお兄ちゃんが入ったら、乱暴な遊びに変えたり、そこで楽しさを追求しながらルールを適当に変えて、「仲良く、楽しく遊ぶ」だけを追求するのが子どもの遊びなのです。サッカークラブや野球クラブなどでの、ルールの中でやるのとは全く違います。子どもが自主的に、自分達で自らやるという遊びが確保されていた、(言い換えれば)ほっといても出来ていた。今保育園では、ルールを決めてしまうことがあります。雪の日は寒いからお家にいましょうと言いますが、子どもは雪の日は外で遊びたいものです。そういうことは無視して、大人の枠の中で、子どもを育てているので、子どもの声に耳をちゃんと傾けていません。子どもがコミュニケーションをとろうとしても、親も忙しいので、子どもも遠慮する。3、4歳で親の顔色を見ますからね、聞く耳を持たない親には話さないです。自分の話を他人が聞いてくれると感じるのは、どのような時かというところ、「相手が自分の目を見てくれて、うなずいてくれて、余計なことは言わないで、ふんふんと体も傾ける」ときちんとして話を聞いてくれたと感じます。ところが、「途中で時計を見たり、背中越しに聞いていると言いながら、パソコンをやったりしながら」だと、話している方は全然話を聞いて貰った感じがしません。ですから、食卓で親がスマホに応答すれば、子ども達は、自分の話を聞いて貰ってないと思うし、友達同士でも話している時に、誰かスマホをいじっていれば『自分って何なのよ』と感じ、「自分は大事にされている」という感覚を失います。

ところが、最近それ(スマホをいじりながら)が当たり前になっているので、その失われている感覚すら分からない。「これって当たり前でしょ、食卓にスマホ出して何が悪いの」となっている。一緒にいるって何なのというところが崩れてきている。でも子ども達同士では話し合っているし、聞いてくれる人を求めているし、自分の話を聞いてくれる大人を、話し掛けてくれる大人を求めているのです。私は子どもの電話相談に携わっていますが、そこでも、電話を掛けるという文化が子ども達には無くなってきていて、ネットのチャットに追われています。本来は電話などで人の生身の声を聞いて、気配を感じながら、自分の思いを伝えるということ、子ども達に体験して欲しいんです。でも、時代の流れに逆らえず、チャットで相談を受けるようなことも始めていますが、如何なものかと思っています。子ども達には、もっと自分の思い、マイナスの

思い、プラスの思いも発言して良いんだ、思い通りにならないけど、思いは表現して良いという環境を育ててあげないと、大人の枠組みの中で、多数決の方につくようになる。悪いと思っても、いじめられるし、怖いから、多い方につくというのは、大人社会の反映です。だから、子どもに何か言う前に、とにかく私達一人一人が変わらないと、子どもは（良くも悪くも）真似をします。子どもが社会の鏡と言われるのはそのためです。

伊藤 ありがとうございます。内海先生からお話しのあった、家族の単位が小さくなってきていることについて、（私が勤務する）本校でも、おじいちゃん、おばあちゃんと住んでいる家は、あまりありません。沼田地域はどうでしょうか、高崎地域では少なくなってきた、核家族やひとり親という家庭がかなり増えています。特にひとり親家庭は、親は本当に忙しくやっています。親子の関係が忙しくなり、薄くなっています。そして、子ども同士の関係性も薄くなっている。内海先生から、ある面、大人のせいなのかな、というお話もありました。とすると、ある意味子どもは犠牲者とも考えられます。そんな中で、様々な事件などが起きています。実際子ども達が巻き込まれた事件、スマホやSNS絡みがあれば、警察の神保さんからお話しをいただけますか。

< SNSの犯罪被害の現状や背景 >

神保 全国でSNSがきっかけで犯罪被害に遭った

18歳未満の子どもの数は、平成29年は1,813人と、過去10年で最多となりました。その中で被疑者に会ったという事案はかなりの数あります。SNS被害者が被疑者と実際に会った理由の第1位

は、「お金や物が貰えるという金品目的」で約30%でした。第2位が「相手が優しかった」「相談に乗ってくれた」で22.9%いました。これは、約4人に1人がSNSの中で、見ず知らずの相手に優しさを求め、被害に遭っているということです。つまり、孤独な子どもがSNSに優しさを求めているといえるかもしれません。このことから、警察ではSNSの危険性を子ども達に話していますが、これだけでは問題は解決しないと感じています。また、実際にあった事案を一つ紹介すると、SNSの匿名性を利用して、成人男性が、女子高校生を装って、言葉巧みに会う約束をして、実際会ってみると女子高校生ではなくて、大人の人がいて車に連れ込まれそうになった事案があります。



伊藤 4人に1人がSNSの中で、見ず知らずの相手に優しさを求め、被害に遭っているということが、衝撃的でした。先程鈴木さんから「人との関わりを求めて、見ず知らずの人につながっていく」というさみしさというか、コミュニケーションの問題の話がありました。その辺りがSNSの危うさ、スマホを通して直ぐにつながってしまう訳ですから、そこに子ども達が引っかかっているのが、現状なのかなと思います。では、我々大人はどうすれば良いのか、最初に話した

調査資料の続きをお話します。

<大人として実践すること、考えること>

伊藤 「食事中のスマホ『親はよくても子どもはダメ』と言われた経験はあるか」、子ども達への質問です。『小学生の約45%が言われた経験がある』と回答しています。そのうち『言われたことに納得できたが約15%、その倍の約30%が、言われたことに、納得できなかった』と回答しています。(言い換えれば)大人は良いけど、あなたは子どもだからダメというのは、子どもにとって納得ができない、ということです。中学生、高校生も同様の傾向です。

そこで、「食事中、親のスマホ使用のルールを作りたいと思うか」と、子ども達へ質問した回答を紹介します。『小学生の約40%は作りたいと思う、中学生、高校生は約30%』となっています。親のルールを作りたいと子どもが考えているデータです。

親というのは「子どもをしっかりと育てていく、しつけていく」のが、当たり前ですが責務です。親自身のスマホの使い方がこのような状態であるのは、大変難しい問題なのかな、まずは我々がどうにかしなければならぬ問題なんじゃないかな、と思っています。最後に(パネリストの)皆様に一言ずつ、今後どのようにしていけば良いか、PTA連合会の小熊さんからお願いします。

小熊 我が家でも食事中、私達大人はスマホを肌身離さず持っていて、ルールなしで使っています。本日の講演やパネリストの皆様の話聴いて、親が背中を見せる、自分達でルールを決めてしっかり守っていくことで、子ども達に伝えていきたいと思いました。

鈴木 幼児期や小中高の時期は、心を育てる大切な時期だと思います。ですから、家族とのコミュニケーションを大切にしていれば良いなあと思います。また、子ども達に夢を持たせるために、親が「運動しなさい」「ネットばかりしないで、他のことをしなさい」など言うだけでなく、一緒に何かをしてみるのも良いのではないかと思います。高校生の皆さんは、ラインなどのSNSだけでなく、顔と顔を合わせたやりとりを大切にしてください。

神保 警察では、SNSは大きな問題と捉えています。情報モラル講習会を小中高で実施する機会がたくさんあります。ただ、保護者向けの講習会が少ないのかなという意見もあります。色々な機会に保護者にお話しが出来れば良いかなと考えています。

伊藤 ありがとうございます。全体を通しての御助言を、内海先生お願いします。

内海 私は今一番優先すべきはスマホなのか、それ以外に優先順位はないのか考えることが大切と考えます。それから、スマホから得られる情報はメディアの情報なので、「それって本当？」と必ず疑いを持つ。悪い話ほど広がりやすいのが特徴です。「それって本当かな？」と考え、誰が何

を言ったとしても、情報の出所と正確性を、膨大な情報量の中で探す力をつけなければいけません。若い人は頭を使って、勝手に思い込まず「それって本当？誰が言ったの？」と確認する。自分でもう一回確かめる。ネットだけではなくて専門書を見るなどして、確かめる必要があります。教科書に書いてあることも、数年後には違うことになる。情報はいっぱいあるけれど、それが本当か自分で確かめるとか、自分で考えることが、大人も子どももこれからしていくべき時代だと思います。是非1日24時間の中で、優先順位を考える。今の自分の積み重ねが、将来の自分を作ることになるので、今自分が何をしなければいけないのかをきちんと考えて、生活をしていくことがすごく大事だと思います。

スマホの問題が起きて、初めて子育てに何が必要か、親子の関係って何が必要かと考えるようになった。「ピンチはチャンス」です。（この問題を）考える時期に来ています。私達自身が、生身の人間として、幸せをどこに追求するかを一人一人が考えていかないと、とんでもない世の中に、すごくスピーディに進んでしまうことがある。（来場された高校生の皆さん達）若い世代に期待しています。

伊藤 ありがとうございます。今の小学生、中学生の親世代は、携帯電話やスマホを操作していた世代です。（環境は）どんどん変わって来ていて、今初めて訪れている危機なのかもしれません。これから加速度を増すかもしれません。「ピンチはチャンス」と捉えることで、何か変わる、これをきっかけに何か考え、新しい知恵が出てきたりして、もしかしたらチャンスになるのかもしれない。我々は能動的に考えて、どうしたら良いか考えていかなければいけないだろう、と思います。

内海先生の講演で、育ちの基本に「眠る、食べる、遊ぶ、愛される」というお話がありました。やはり、大人は子どもを愛さなければならない、そのような中で、子どもは育っていく、社会性がついていくものです。その部分をスマホにやらせてしまったのでは、いけないんだと思います。これをどうしていったら良いんだろう、今後とも考えていきたいなあ、と思っています。とっても大事な問題だと思いますので、来場された皆様方は、色々な人に伝え、そして一緒に考えて欲しいと思います。特に、子育て世代の方には伝えていただきたいと思います。それから、高校生の皆さんは、是非能動的に自分達で議論して、考えて下さい。

本日のパネルディスカッションが、（来場された皆様方の）ヒントになればと思います。

以上で終了とさせていただきます。

